

はじめに——大変だ!! 巨大くらげ出現

昭和三十三年（一九五八）の六月、わたしは広島から松江の放送局に転勤を命じられ、広島駅の端っこのホームから古い蒸気機関車に引っぱられた「快速ちどり」で、新婚早々の妻と共に出発、はじめに中国山脈を越えた。

芸備線、木次線と、快速とは名ばかりの列車は息もたえだえに、斐伊川にそって走った。そして出雲神話の須佐之男命ゆかりの鳥上山（船通山）を横に見て、列車は山を下り切った。

すると、そこにひらけたのは広大な出雲平野と、海と見まごうばかりの出雲湖の水面であった。その日、灰色の雲が低くたち込め、点在する農家のまわりには緑なす築地松が、城壁のようにびっしりと植えこまれていた。八雲立つ出雲の雲と、八重垣がそこにあっただのである。

列車は宍道湖畔を東へ走る。

今にも降り出しそうな雨雲のせいで視界は悪い。風も強いのだろう、濁った波が高く舞い上って岸辺の岩に噛みついていて。鏡のような湖面を想像していたわたしは意外だった。わたしはじっと、窓ごしに、この不気味ともいえる宍道湖のたたずまいを眺めていた。

神秘というよりは、不可思議・怪奇な幻想を誘うような宍道湖であった。

しかし、この宍道湖は、たまたま御機嫌が悪かったようで、晴れた日には、静かで女性的な美しい顔をのぞかせてくれる。

だが、湖から立ちのぼる水蒸気は、じめじめと肌にまつわりつき、風呂から上って室内に吊るした手拭いに、翌朝、薄っすらとカビが生えていたのは驚いた。

土地の人々は、宍道湖を愛しながらも、いつもその御機嫌をうかがっているようなところがあった。何か、人知で計り知れないものを秘めている巨大な湖である。

昭和三四年（一九五九）四月二六日は日曜日であった。

午後二時過ぎ、わたしは、宍道湖を見下す床凡山しょうざんの頂きにある放送局にいた。

アナウンサーが喋っている。

「皆さん、今晚の科学解説の時間は島根水産大学の助教授の山本四郎さんにお出でいただきまして、色々とお話をおうかがいしたいと存じます。先生、さきごろの新聞をにぎわせました日本海の巨大なくらげでございますが、あんな大きなものは珍らしいんでございませうね」

助教授が答える。

「そうですね、私たちの知っております範囲では鉢水母はちくみづぼの大形のものに、ユーレイクラゲというものがありまして、これの大きなものになりますと、傘の直径が二メートル、触手の長さが三〇メートル以上のものがあります。しかし近ごろとれたものは傘が三メートルといいますから、やはり何らかの異常を認めないわけにはいかないでしょう」

そこへ、もう一人の若いアナウンサーが原稿片手に青ざめた顔をして飛び込んで来る。

「皆さん、さきほど午後一〇時五分、松江市の袖師ヶ浦の、宍道湖畔で、松江市雑賀町二丁目の木本正治さん、二三歳が行方不明になりました。いっしょに夜釣りをしていた同じ町の山口静夫さんの話によりますと、木本さんは巨大なくらげにおそわれて水中にひきこまれたということです。なお現地からの報告によりますと、現場の水中は青白く光って不気味だそうです」

この第一報に続いて、次々に目撃者の談話が入って来て、警官の一人も水中にひきずりこまれるに至り、番組は中止して、アナウンサーは山本助教授と共に宍道湖畔に向い、現地からの巨大くらげ実況放送となった。

巨大くらげは青白い光をはなちながら、波をけたてて湖の沖から松江市に向かって進んで来る。奇妙な音と、強い放射能をまきちらしながら次第にその全貌を明らかにして行く。

駆けつけた自衛隊の砲火もききめがない。

この巨大くらげの正体は何か。

湖底深くに放射能を含む鉍脈があり、その放射能を浴びてくらげが巨大化したものか、あるいは目撃者の一人がいった、空から湖に向かって閃光をはなちながら落下していった物体に関係ある宇宙からの侵入者なのか。

その時、スタジオの副調室にいたわたしに電話がかかってきた。

「うちのジイサマと息子が宍道湖に漁に出ているが大丈夫だろうか」

「大丈夫ですよ、今、放送しているのはラジオドラマですよ」

わたしは笑いをこらえて答える。

「しかし、みんな心配して見に行っているが」

「よくお聞き下さい。松江には科学解説番組はないし、事件が起きたのは午後一〇時過ぎといっているでしょう。今は真昼間の二時でしょう。お話なんですよ」

一九三八年（昭和十三年）奇才オーソン・ウェルズが、H・G・ウェルズの「宇宙戦争」をもとにしたラジオドラマ「火星人侵入」をCBSネットで全米中継した時、本当に火星人が襲って来ると思いこんで大パニックが起きたという、そのミニチュア版を松江局で放送した時のエピソードなのである。

初めて見た宍道湖の印象から、いつかこの湖から怪物が出現するラジオドラマを制作して人々を驚かしてやろうとわたしは考えていたのだ。

SFドラマ「巨大くらげ出現」については、第三章「わが心のミステリードラマ」で詳しく書いてるので御覧いただきたい。

● 誤解と偶然

昭和二十九年（一九五四）四月一日、午前九時三〇分、わたしは一通の辞令書をうやうやしく戴いた。

上野友夫

職員見習

放送管理職

本給九千壹百七拾円

広島中央放送局放送部編成課勤務とする。

昭和二十九年四月一日

日本放送協会

印

入局早々管理職とはすごいなどと誤解してもらっては困る。

放送管理職というのは一般の庶務・経理とは異なり、放送番組の編成や放送現場の裏方ともいふべき著作権（文芸・音楽）の管理とか番組のPRをやる職種であった。

わたしは昭和二八年の九月にNHKの採用試験を受けた。

その時、募集した職種は四つ、事務職・放送職・アナウンサー・放送記者であった。

事務職・アナウンサー・放送記者というのは文字通りすぐ判る。放送職とは何か、募集要項によればこうなる。

放送職（プランナー、プロデューサー、ライター、ニュース解説、その他現業的な職務、放送管理的な事務）

つまり放送職にはプロデューサー（その頃はディレクターという言葉は使われていなかった）やライターなどの放送現業職と、編成・著作権といった放送管理職の二つの職種があったのだ。

わたしが望んだのはライターであった。

そして採用されたのは放送管理職、放送職といっても制作の現場ではなく裏方である。

ラジオドラマ、なかんずく推理ドラマの演出を手がけて三〇年になるわたしと放送との関係は、最初から誤解と偶然が重なり合っていたように思える。

わたしがライターを望んだ理由を考えてみる。わたしは中央大学法学部の法律科だが、司法試験を受けるほどの頑張り屋でもないし、又、その才能もないと諦めていた。そのかわり、せっせと小説を書いては文芸雑誌や娯楽雑誌に投稿し、コントなど含めるとかなりの作品が活字になっていた。だが小説家として身を立てることの困難さは充分判っていた。

わたしは月給をもらいながら小説家にもっとも近い職業として出版社の編集者を考えていた。いくつかの出版社の試験も受けた。学科試験に合格し面接も自信があったが結果は不合格、聞けば採用されたのはわずかに数名、しかも著名な作家など強力なコネのある者で、はじめから決っていたのだという。それなら公募などしなければいいと腹が立った。

その点、NHKは公平だろう、採用する人数も多い。そしてなによりもありがたいのはその頃一般化した「学内選考」がないことだ。大阪のある民間放送を受験するための学内選考に落ちた経験がある。大学側としてはどうしても学業成績のいい者を選ぶから、わたしの成績では当然と
いっていいだろう。

それに較べればNHKはいい。提出書類を本人が持つていけばそのまま試験が受けられるのだ。募集の中にライターとはつきり書いてある。放送作家という名称には、どこか新しい響きがある。

小説家や劇作家がラジオドラマを書いているのは知っていたが、NHKの職員として月給をもらいながらドラマが書けるのならこれにこしたことはない。

そして筆記試験に合格、一〇月中旬に面接試験を受けた。

色々なことを聞かれたが、志望はライターであることを強調し手ごたえは充分あったように思えた。

一〇月下旬、採用通知を受けたわたしは、早速ラジオドラマ脚本集などを買い込んで勝手に放送作家になったような気分になっていた。

後で聞けば、この段階でコネのある連中は無給のアルバイトとか、予行演習とか、放送局に顔を出して演出の助手の手伝いといったようなことをやっていたらしい。そうすれば局内の事情にも通じ、本採用になった時にも何かと有利だったと思えるが、わたしにはそんな智慧もなく、家でぶらぶらしていた。

そんな時、一二月の下旬か一二月のはじめ、『宝石新人二十五人集』という部厚い雑誌が送られてきた。

◎——探偵ドラマとの出会い

探偵雑誌『宝石』では毎年、短篇小説の懸賞募集を行い、この年昭和二八年にも多くの応募作品があった。

第一次の選考で残った二三一篇の中から、二五篇を選んで、これを『別冊宝石』として市販し、その中から首席一名参萬円、次席一名貳萬円、佳作五名以内壹萬円を、江戸川乱歩、水谷準、城昌幸の三名で選ぶというものだった。

通常の文芸雑誌の懸賞募集でいえば、第二次か三次の選考に残った作品を活字にして市販するというもので、応募者にとっては、とりあえず活字になるというのでうれしいやり方であった。

選者してみれば生原稿を読むより楽であるというメリットもあったるうが、探偵小説という特別なジャンル故に、その程度の水準の作品を集めたものでもけっこう商売になったということかも知れない。

その新人二五人集の目次には、「復讐」上野友夫と赤い活字で印刷されていたのだ。

「復讐」はわたしが書いたはじめての探偵小説で、一見何でもない交通事故にしくまれた罍を承知で、死後、真犯人に復讐出来る喜びのために自ら処刑される男の屈折した心理を描いたものだ

った。

この作品、結果的には佳作にも選ばれず、選者から手厳しい批評を受けたのだが、わたしと推理ドラマをドッキングさせた記念すべき作品となった。

ちなみにこの新人二五人集には白家太郎の「みかん山」という作品が載っている。

さらに二年後の昭和三十一年の新人二五人集には、わたしの「消えた街」（川野京輔の筆名を使用）と共に、白家太郎の作品が二つ掲載されており、その中の一つ「落ちる」が首席入選、わたしのは佳作に選ばれている。

この白家太郎は後の多岐川恭で、「落ちる」は直木賞受賞作となっている。

このように『寶石』の懸賞は世間的に評価が高く、わたしがNHKに入局前に新人二五人集に載ったことで、一人前の探偵作家になったような気分になったのも、今から思えば甘い、無理もないことであつた。

よし、これからは探偵小説を書きまкруう、そしてNHKのライターとなつたら、探偵ドラマというジャンルを開拓しその第一人者となろう、小説とドラマの二股かけての「探偵作家」の第一号になるのだ。こんな夢で胸をふくらませて、わたしはNHK入局の日を待っていた。

だがわたしは知らなかつたのだが、実は、この年、NHKではテレビの生放送開始にともない職制が変り、脚本課は姿を消し、職員ライターはそれぞれプロデューサーとして制作現場に配属されていたのだ。

それに万一、脚本課が存続し職員のライターとなつたとしても、わたしが考えていたようなど

ラマ作家にはなれなかったろう。NHKには職員ライターその他に、契約ライターが数十人おり、彼等こそが放送の第一線で活躍する放送作家であり、スタッフライターといわれる職員ライターには番組の構成など地味な役割しか与えられてはいなかったのだ。

それに大学卒の新人は、原則として地方局からスタートさせるといふNHKの方針があり、わたしは広島中央放送局放送部で、ローカル番組の編成、著作権の処理、放送実施時間の統計などの事務を担当することとなったのである。

かくて探偵ドラマのライターになろうとしたわたしの夢は消えた。

ところが、当時の広島局はラジオ放送だけだったが、なんと探偵ドラマの花ざかりなのだ。その中心人物が鬼怒川浩きぬがわひろしだった。

鬼怒川浩は広島局の契約ライターとして、ローカルのラジオドラマ、特に探偵物の原作や脚本を書いていた。

昭和二十二年三月、探偵雑誌『宝石』(岩谷書店)が創刊され、その第一回の懸賞小説の入選者は六名だった。

飛鳥高「犯罪の場」

鬼怒川浩「鸚鵡裁判」

独多どくた甚九じんく「網膜物語」

香山滋「オラン・ペンデクの復讐」

山田風太郎「達磨峠の事件」

岩田賛「砥石」

島田一男「殺人演出」

この鬼怒川浩は広島の通産局の役人だったので、地元のNHKが注目し脚本を依頼したことから、やがて職を辞し、NHKの契約ライターとして本格的に探偵ドラマを執筆することになったのだ。そしてわたしが入局した頃、「バラ屋敷の女」「兵隊乞食」「黄水仙の女」など探偵ドラマを連続又は単発で書きまくり、広島局の名物番組になっていた。

探偵ドラマのライターになる夢が破れたわたしにとって、それは残酷とも思える環境であった。

●——探偵ドラマを書く

放送職として広島局に赴任した新人は二人で、わたしと佐々木欽三であった。しかし彼は現業職としてはじめから放送の現場に廻され社会・農事番組のアシスタントを勤めた。

同期の桜で、しかも文学好きなどころも似ていたところから、よくラジオドラマは果して文学たりうるのかなどと議論を交した。

お互に、ドラマの演出をさせてもらえない不満もあったのだが、いずれ自分達の手で新しいラジオドラマを作るのだという理想に燃えていたのも事実だった。

ライターの夢が消えたわたしにとっては、演出者として探偵ドラマの制作にたずさわることが次の目標であった。

上司にもその希望は伝えてあったが、昭和二九年中にはかなえられなかった。

昭和三〇年五月、わたしと佐々木欽三が中心となって同人誌『放送文芸』を創刊した。

わたし達より一年先輩で、すでにラジオドラマの演出をしていた岡崎栄にも仲間になってもらい同好の士を募集し、その会費と、わたし達のポケットマネーで『放送文芸』は一二号まで発行を続けた。

当時の放送部長は永原芳雄で、かつて自ら放送の脚本を書いたこともある大ベテランで、わたし達の運動をバックアップしてくれた。

昭和三〇年、わたしは『探偵倶楽部』『探偵実話』『読切雑誌』などに探偵小説や読物を一〇篇ほど発表し、日本探偵作家クラブ（現在の日本推理作家協会）の会員となった。

この年、『放送文芸』の創刊にこぎつけた後、わたしは放送部長の配慮で放送現業職に転じ、学校放送のドラマ「綴方風土記」「郷土の昔」、子供のど自慢「声くらべ腕くらべ子供音楽会」それに俳句・短歌・川柳などの入選作を発表する「ラジオ文芸」の番組を担当することになった。これらはいずれもローカル番組で、東京から全国ネットで流れてくる番組を脱して、地方局が独自に制作するものである。

朝・昼・夜のニュースの一部、朝七・一五〇七・三〇、夕方六・四五〇七・〇〇の県民の時間の様に、はじめから地方局がその県に住む人々を対象にした番組を編成することが決められている時間帯もある。それに対して音楽、演芸、ドラマなどは、あらかじめローカル枠が定められていないので、その地方局の実情に合わせて、全国中継される番組をはずして地方制作の番組を流

すことになる。しかし、それも勝手に脱することが出来ない番組と、脱してもいい番組とがきちんと定められているので、それに合わせて番組改定時に東京に申請することになっていた。

広島は、中国地方を管轄する中央局なので、岡山・松江といった管内局を含む中国地方向けの管中番組も制作していた。

ともあれ、ローカル番組ではあっても、わたしは番組プロデューサーとしての第一歩を踏み出すことになった。

そして思いがけず、わたしははじめての探偵ドラマを他の局のために書くことになった。

広島の間聞放送は「ラジオ中国」で、地元のスポンサーをつけてラジオドラマを定時番組として制作していた。

その「テアトル・ヒロシマ」に、わたしは三〇分の探偵ドラマを依頼されたのである。

NHKにとってはライバルともいえる民放に、NHKの職員がドラマを書くのは如何なものか。筆名は使っても許されないだろうと思いつつ放送部長に相談すると、言下にOKが出た。

淡美一郎という筆名で書いたドラマは「被害者は誰だ」という作品で、ラジオ中国の放送劇団の出演、演出はふくき・もとのりであった。

昭和三〇年一〇月二〇日午後七時三〇分からオンエアされた。

すでにその時は探偵作家クラブの会員となっていたのだが、当時の探偵作家クラブの会報に「本格探偵ドラマの失敗」としてこのことに触れているのでその一部を紹介しよう。

「一〇月の下旬に当地の放送局から、被害者は誰だ」というわたしの探偵ドラマを放送した。普

通の、犯人は誰だ——の裏を行ったものですが、一応、本格探偵物の構成をもっています。従つてスリラーとしての凄みや恐ろしさはありません。トリックは刑法の緊急避難と正当防衛を使い、判例などを引用したり難澁を極めたものです。小説書きが書くドラマはモノローグが多くなるといふ言葉通り、犯人である殺人請負業者のわたしのモノローグが大半を占めていました。といふことは説明が多く、一本調子で、ドラマチックなものがないといふことです。まずまず探偵小説の鬼ならともかく、一般の人達にとつては面白くないものだったのです。しかしこれは今になつて考えることで書く時は勿論、本格的な謎解きのみを狙つたすごい探偵ドラマといふ意気込みで演出者には随分と無理をいって原案通りさせ、たとえ本格物でも良いものであれば一般人にも必ず受けるに違いないと確信していたのです。放送時間は午後の七時半というゴールデンアワー。緊急避難のトリックは未だ誰も使っていませんし、面白いものですが、どうも刑法の条文を長長と説明しなければなりませんし、少なくともラジオ向きではなかつたのです。(中略)——

謎解きの本格物は筋をくりかえしくりかえし説明しなければわからないのです。小説のように前の頁をめくつて調べることは不可能です。どうも評判がよくないのでくさっています。しかし中には、説明的な言葉のやりとりで仕組まれた様なストーリーが全篇の込み入つたテーマをよく理解させてくれた。心臓の悪いわたしが病床で動悸を打たせながら主役の言葉に強くつり込まれて行つた様子を御想像下さい」とおほめの手紙をくれた若い女性もありました。この人は紙と鉛筆を用意して気がついた点をメモしてくれてトリックを理解してくれたのです。わたしはこの女性の手紙で元気を恢復しました。ラジオドラマは殻をやぶれ——分かりやすい筋、一つの事件、起

[著者] 川野京輔 (かわの・きょうすけ)

1931年、広島県生まれ。本名・上野友夫。53年より『千一夜』や『風俗草紙』へ短編の投稿を始め、同年末には『別冊宝石』の懸賞に本名で応募した「復讐」が入選し、事実上の作家デビューとなる。中央大学法学部法科卒業後、54年にNHKへ入局。広島中央放送局放送部、松江放送局放送部を転任した後、60年に東京勤務となり芸能局へ配属される。91年にNHKを定年退職。広島中央放送局在職中に広島中央局長賞受賞。日本推理作家協会名誉会員。

推理SFドラマの六〇年

——ラジオ・テレビディレクターの現場から

2019年5月20日 初版第1刷印刷

2019年5月30日 初版第1刷発行

著者 川野京輔

装訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

©2019 Kyosuke Kawano, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1764-4